

I

水のある風景



1 船



さまざまな船が見られる。江南では、河川が多く、船が人々の生活に重要な位置を占めていた。また、南方で生産した食糧を都の北京へ運ぶのにも船が大きな役割を果たしていた。画面の右上の船着場に、

2艘の大型船が停泊している。これは「漕舫」とい、食糧を運ぶ運搬船である。平底の喫水の浅い川船で、1本または2本の帆柱を立て、2000石の米を積むことができたという。推進装置として、風力を



- | | | |
|-------------|-------------------|----------------|
| 1 曳き船 | 21 棹 | 40 もやい綱（船纜） |
| ② 船を曳く | ②② 棹を差す | 41 甲板 |
| 3 櫂（槳） | 23 屋形の二階（楼船） | ④② 背負う |
| 4 小船 | ②④ 寝る | ④③ 担い棒で運ぶ |
| 5 帆柱（桅） | 25 枕 | ④④ 船倉から荷を揚げる |
| 6 帆綱（帆索） | 26 屋形（頭船） | 45 歩み板 |
| 7 遊覧船 | 27 屋形の両側にある通路（廡堂） | 46 網代帆に腰掛ける |
| ⑧ 官船 | 28 船縁（舷） | 47 槌 |
| 9 突き出し日除け | 29 幟（幡） | 48 罽綱 |
| 10 提灯 | 30 繫船柱（將軍柱） | 49 罽屋根（舵楼） |
| 11 鉄錨 | ③① 先払いをする召使い | 50 罽の繫船柱（後將軍柱） |
| 12 罽屋根（船棚） | 32 桴（槌） | 51 罽（船） |
| 13 厨房 | 33 銅鑼（金鑼） | 52 舵 |
| 14 河を眺める女性 | 34 舳先の装飾 | 53 二階の罽屋根 |
| 15 腰掛け（板櫂） | ③⑤ 食糧運搬船（漕舫） | 54 幕（幔） |
| 16 犬 | 36 帆柱（頭桅） | ⑤⑤ 舳を漕ぐ |
| 17 屋形（後船） | 37 支柱（中桅） | 56 琵琶舳 |
| ①⑧ 莫蔭を敷く | 38 舳先（舳） | 57 舳縄（舳索） |
| 19 折り畳んだ網代帆 | 39 もやい柱 | 58 苫（船篷） |
| 20 屋形（中船） | | |

利用する帆のほか、舳2本と棹10本を使う。水夫が棹を差しながら、船の前部から後部へと屋形の両側にある通路を歩き、船を前進させる。

その左下に、もう1艘の大きい船がある。これは

「官船」あるいは「官座船」といい、官僚が長い旅をするときに使う船である。洒落た屋形があり、舳先に装飾が施されているが、主な構造は漕舫とほとんど変わらない。長旅をするため、船の後部に厨房が設けられている。主人とその家族の寝室は後部の屋形にあり、前部の屋形の2階に水夫たちの寝室が設けられている。

帆はほとんど竹で編んだ網代帆である。使わない時には、折り畳んで屋形の上におく。帆綱を作る材料は麻である。

また、この一つの画面に、前近代中国における船のほとんどの種類の推進方法が見られる。先にあげた帆と棹、舳のほか、小船で櫂も使われる。向こう岸には、一艘の曳き船が見られる。中国の舳は、形によっておおむね琵琶舳と板舳の2種類がある。ここに示されているのは、羽の部分が琵琶に似た形となっている琵琶舳である。（彭）

2 船着場



- | | | | |
|----------------|--------------|--------------|----------------|
| ① 食糧運搬船 (漕舫) | 18 子供 | 35 四角い日傘 | 52 指差す |
| 2 綱 | 19 黒犬 | 36 茶店の主人 | 53 女船頭 |
| 3 屋根 (屋頂) | 20 渡し舟 | 37 腕を組む | 54 吹流し (幌子) |
| 4 日除け (幔) | 21 船頭 | 38 長机 | 55 桶を天秤棒で担ぐ |
| 5 艦の繫船柱 (後將軍柱) | 22 棹を差す | 39 水甕 | 56 子供の手を引く |
| 6 艦 (船) | 23 たくし上げたズボン | 40 茶碗 (茶杯) | 57 女性の上着 |
| 7 舵 | 24 乗客 | 41 盆 (托盤) | 58 扱き帯 (汗巾) |
| 8 立ち話をする | 25 煙管 | 42 腰掛け (板凳) | 59 スカート (裙子) |
| 9 水を汲む | 26 呼び掛ける客 | 43 帽子 (暖帽) | 60 袖なしの上着 (半臂) |
| 10 水桶 | 27 手を振る | 44 上着 (外套) | 61 招福札 (門箋) |
| 11 裸足 | 28 束ねた薪 | 45 長着 (袍子) | 62 橋 |
| 12 旅人 | 29 籠 (筐) | 46 手甲袖 (馬蹄袖) | 63 欄干 |
| 13 短い上着 (馬褂) | 30 胡坐 (盤腿坐) | 47 笠 | |
| 14 風呂敷 (包袱) | 31 道士 | 48 櫂 (槳) | |
| 15 木棒 | 32 頭巾 (道冠) | 49 裾紐で止める | |
| 16 長柄傘 | 33 直綴 (道袍) | 50 艦を漕ぐ (揺艦) | |
| 17 楼門をくぐる | 34 茶店 (茶棚) | 51 艦縄 (艦索) | |



川が合流し水面が広がったところに自然にできた船着場である。岸が整備されておらず、緩やかに水に接している。江南では春は川の流量が一年のうちで最も少なく、川原の面積が広い季節である。

左側に岸からやや離れて停泊している大きな船は、米穀を運ぶ「漕舫」だろうか。その後ろを横切るかたちで、屋根が付いていない小さな渡し船が4人の乗客を乗せて岸を離れようとしているが、長柄傘を左肩に担ぐ男性が右手を高く挙げ、船を呼び戻そうとしているようである。

渡し船の船頭は棹一本で船を操作しているが、その手前、苫のある船では艫だけで、さらに手前の屋形のある船では艫と棹を組み合わせて操作してい

る。注意すべきなのは、右下に女性の船頭も見られることである。

大型船以外はあまり錨は使わないが、岸辺にはもやい杭は見られない。棹や水辺の木の幹が使われたのであろう。画面の中央に茶店が見える。四角い日傘の下に、多くの茶碗が長机の上に並んでおり、客は腰掛けに座ってお茶を飲みながら待合ができる。しかし、利用者は官僚らしき者一人だけである。大勢の客は茶店からやや離れた岸に近いところで待っている。立つ者が多いが、疲れたのか地面に直接胡坐をする男性もいる。なかに道士のような宗教者も見られる。茶褐色の「道袍」は襟が打ち合せで、黒い縁を付けている。

画面の上方に、楼門が描かれている。城壁が見られず、検問所のような施設である可能性が高い。「姑蘇繁華図」に描かれた動物は、馬、驢馬、羊、牛、鳥、犬などに限られているが、ここの城門前では黒い犬が確認される。

なお、画面の右側、橋のたもとに数名の女性が描かれているが、船着場という場所との関連性は興味深い問題である。(王)

3 船着場と驢馬

- | | |
|---------------|-----------------|
| 1 馬 | 32 こんろ (炉) |
| 2 脚絆 (綁腿) | 33 子供の世話をする |
| 3 担い棒で運ぶ | 34 でんでん太鼓 (拔浪鼓) |
| 4 歩み板 | 35 子供 |
| 5 幟 (幡) | 36 舵柄 |
| 6 もやい杭 | 37 船縁 (舷) |
| 7 洗濯物 | 38 舵 |
| 8 官船 | 39 琵琶船 |
| 9 屋形 (頭艙) | 40 船縁に掛けた棹 |
| 10 折り畳んだ網代帆 | 41 天秤棒で担ぐ |
| 11 屋形 (中艙) | 42 石橋 |
| 12 莫蔭を敷く | 43 切り石 (条石) |
| 13 艦網 | 44 アーチ (拱券) |
| 14 艦屋形 (船艙) | 45 橋脚 (橋墩) |
| 15 突上げ窓 (支窓) | 46 驢馬 |
| 16 艦屋形にいる女性 | 47 轡 |
| 17 倒した帆柱 | 48 手綱 (繮縄) |
| 18 跪いて荷を持ちあげる | 49 帽子 (暖帽) |
| 19 たくし上げたズボン | 50 鞍 |
| 20 繫船柱 (將軍柱) | 51 錠 |
| 21 荷を組む | 52 尻繫 |
| 22 槌 | 53 石段 (踏躰) |
| 23 土瓶 (水壺) | 54 巻き上げた辮髪 |
| 24 ざる (簞) | 55 風呂敷を肩に掛ける |
| 25 棹を操る男 | 56 上着 (短衣) |
| 26 苫 (船篷) | 57 ズボン (褲子) |
| 27 儀仗 | 58 子供の手を引く |
| 28 艙を漕ぐ女性 | 59 総角 |
| 29 火を扇ぐ | 60 輿 (轎子) |
| 30 団扇 (蒲扇) | 61 長柄 (轎桿) |
| 31 葉缶 | 62 輿かき (轎夫) |
| | 63 布靴 (布鞋) |

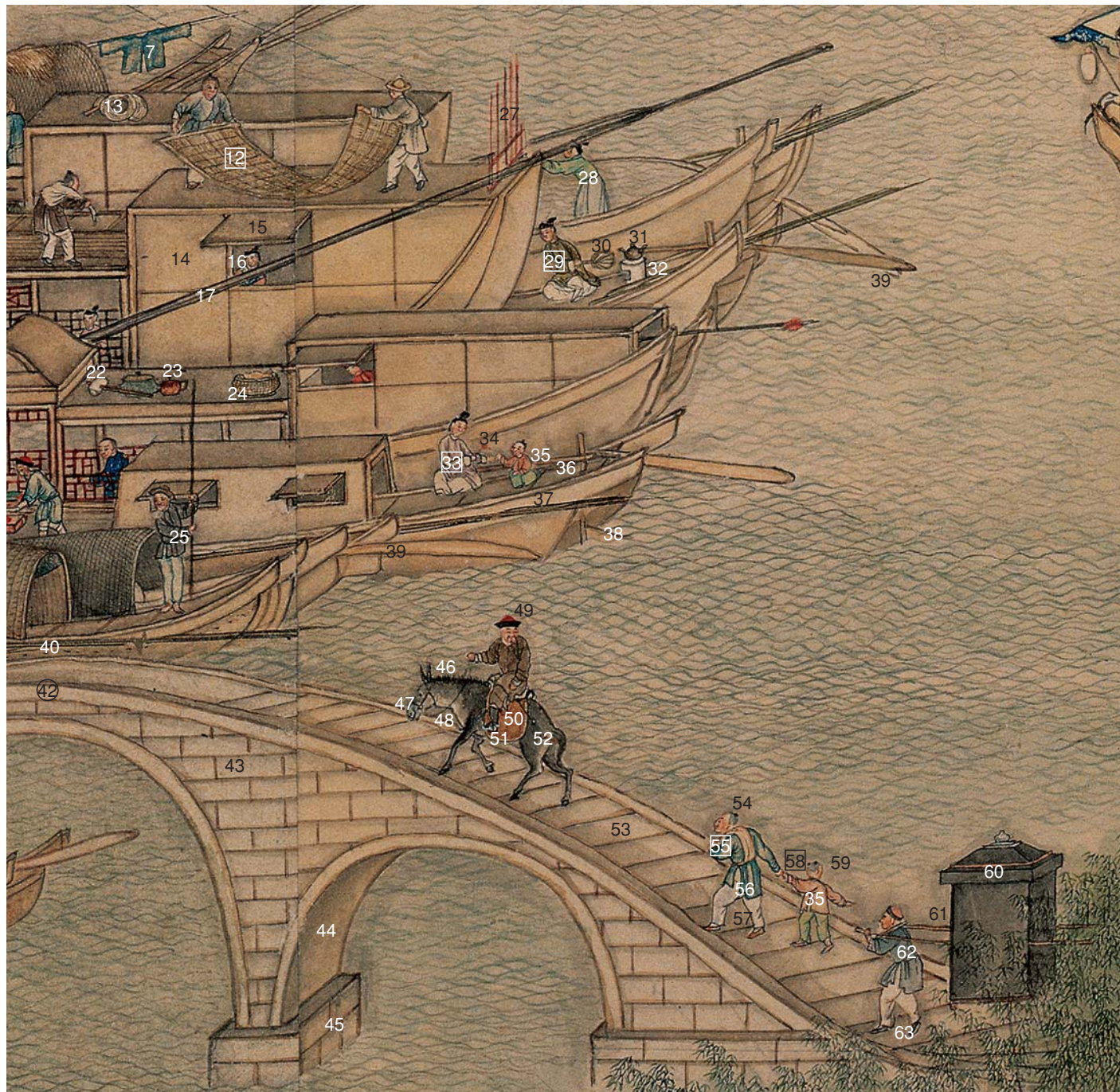


船着場に停泊している何艘かの船と一本の橋が描かれている。水郷といわれる江南でよく見られる風景である。

幟が立てられている船が官僚の乗る船であろう。その手前にある船の舳先は見えないが、艦に飾ってある儀仗から、やはり官僚が乗るものと思われる。船体が大きく、倒した帆柱と折り畳んだ網代帆が見られ、官船のようである (官船については、1を参照)。

そのさらに手前に帆柱のない船があり、近距離を航行する沙飛船と思われる。沙飛船は蕩湖船ともいい、主に遊覧船として使われるが、こうして交通機関の役割を果たす例もあった。その下に比較的比較的に小さい船が3艘あり、いずれにも荷物を陸揚げしている人が見られる。色とりどりの荷物が赤い容器に入れているため、祝いに贈る祝儀かもしれない。

何人かの女性の姿が見られるが、いずれも表に出



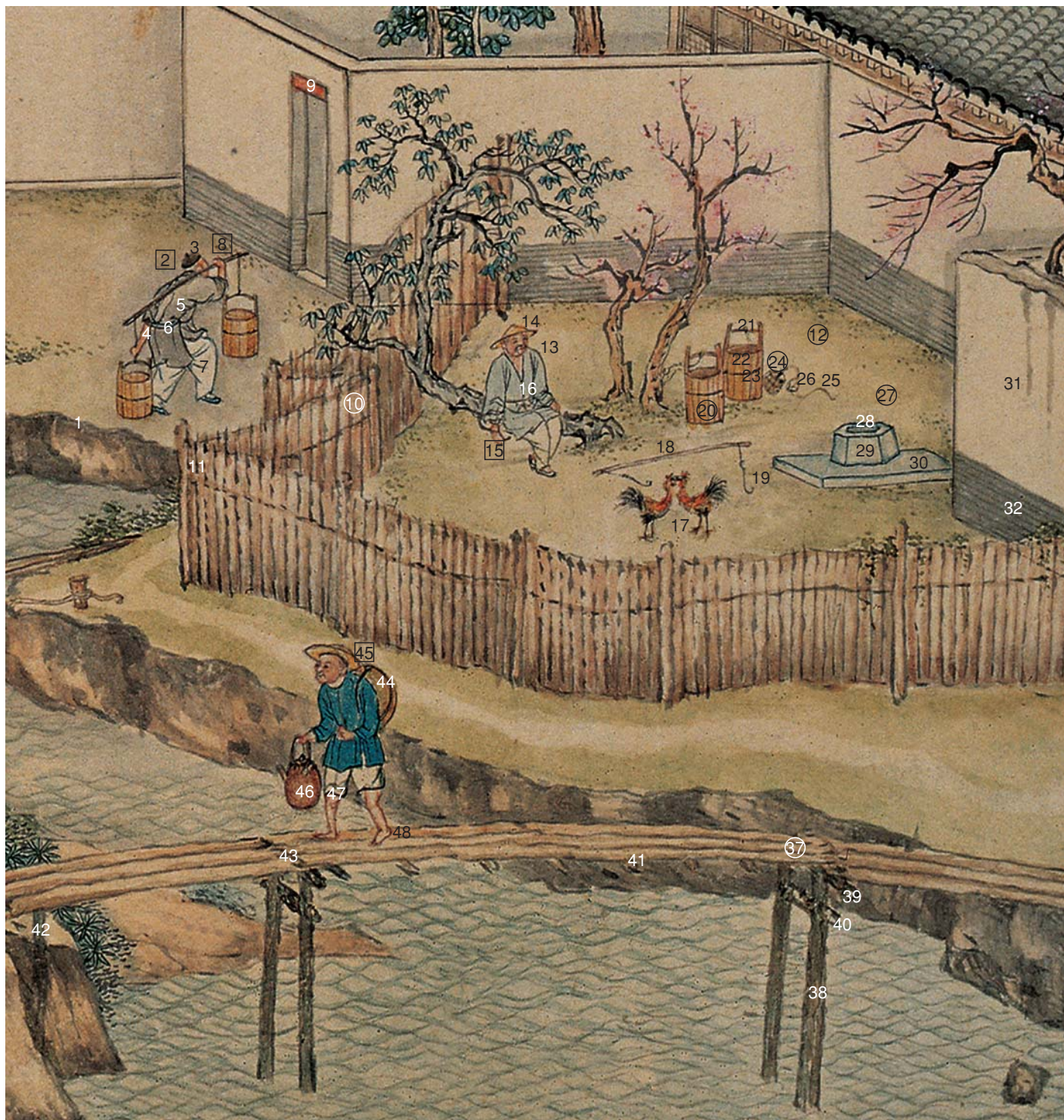
ておらず、船の後部にとどまっている。なかに子供の世話をする女性もいる。水夫の家族であろう。

また船の航行中は、推進装置として使われる棹を、停泊するときに河の底に挿し、もやい杭として使う様子が見られる。ほかに、船縁の外側に掛けた棹もある。艀は水から上げられ、艀に置く。艀を保護するためであろう。

画面の下方に、3つのアーチを持つ石橋があり、

驢馬に乗って橋を渡る人がいる。このような橋は「三拱石橋」という。南船北馬といわれるが、画面の左上に木に繋がれている馬が2頭いることから、江南でも乗馬はそれほど珍しくないことが窺える。驢馬は馬より体型が小さくて扱いやすいため、蘇州あたりの人々にも好まれたといわれる。足の便として使うほか、驢馬に乗って散策することは当地の文人にとって大きな楽しみであったという。(彭)

4 水辺の庭



長閑な郊外水辺の風景である。

江南では農村や都市を問わず、裕福な家は庭を持っていた。庭は必ず垣に囲まれているが、その材料や作り方は多彩である。「姑蘇繁華図」でも、板塼、網代垣、乱積の石垣、煉瓦壁など、さまざまな垣や塼が見られる。ここでは、岸の形にそって短冊板を横に並べ、縄で繋ぎ、所々にある止め杭で地面に固

定されている。

庭には井戸が見える。日本と違って中国では井戸側は石づくりが多く、形は円形と六角形が最もよく見られる。そして多くの場合、地面にまず「井台」と呼ばれる敷石を敷き、一段高い敷石の上に井戸側が設置されている。中国北方の乾燥地域では井戸が深いので、滑車などの装置が設けられるのが普通で



- | | | |
|------------------------|---------------|--------------|
| 1 岸 | 17 喧嘩する雄鶏 | 33 板戸 (木板門) |
| ② 天秤棒で水を運ぶ | 18 天秤棒 (扁担) | 34 「門神」 |
| 3 小帽 | 19 鉤 (掛鉤) | 35 くぐり門 |
| 4 巻き上げた袖 | ⑳ 水桶 | 36 小道 (小径) |
| 5 上着 (短衣) | 21 桶の取っ手 (提手) | ㉑ 木橋 |
| 6 扱き帯 (汗巾) | 22 短冊板 (桶壁) | 38 橋杭 (橋柱) |
| 7 ズボン (褲子) | 23 箍 | 39 梁木 |
| ⑧ 天秤棒を支える | ㉒ 釣瓶 (吊桶) | 40 貫 |
| 9 楣 <small>まぐさ</small> | 25 釣り縄 (井縄) | 41 桁木 |
| ⑩ 垣根 (籬笆) | 26 錘 (墜子) | 42 補強杭 |
| 11 留め杭 (木柱) | ⑳ 井戸 | 43 止め縄 |
| ⑫ 庭 (後院) | 28 汲口 (井口) | 44 籠 (竹籃) |
| 13 農夫姿の男性 | 29 井戸側 (井口石) | ④ 肩にかける |
| 14 笠 | 30 敷石 (井台) | 46 土瓶 (水壺) |
| ⑮ 木に座る | 31 壁 | 47 たくし上げたズボン |
| 16 対襟の上着 | 32 腰 (鞆脚) | 48 裸足 |

者が曲がった木に座り、喧嘩する鶏を眺めている。中国においては闘鶏の歴史が長く、春秋時代からその記録が見られ、文学、絵画作品にも闘鶏の場面が多く登場するが、ここの闘う鶏を見る場面はのんびりとした農村生活の象徴であるといえる。

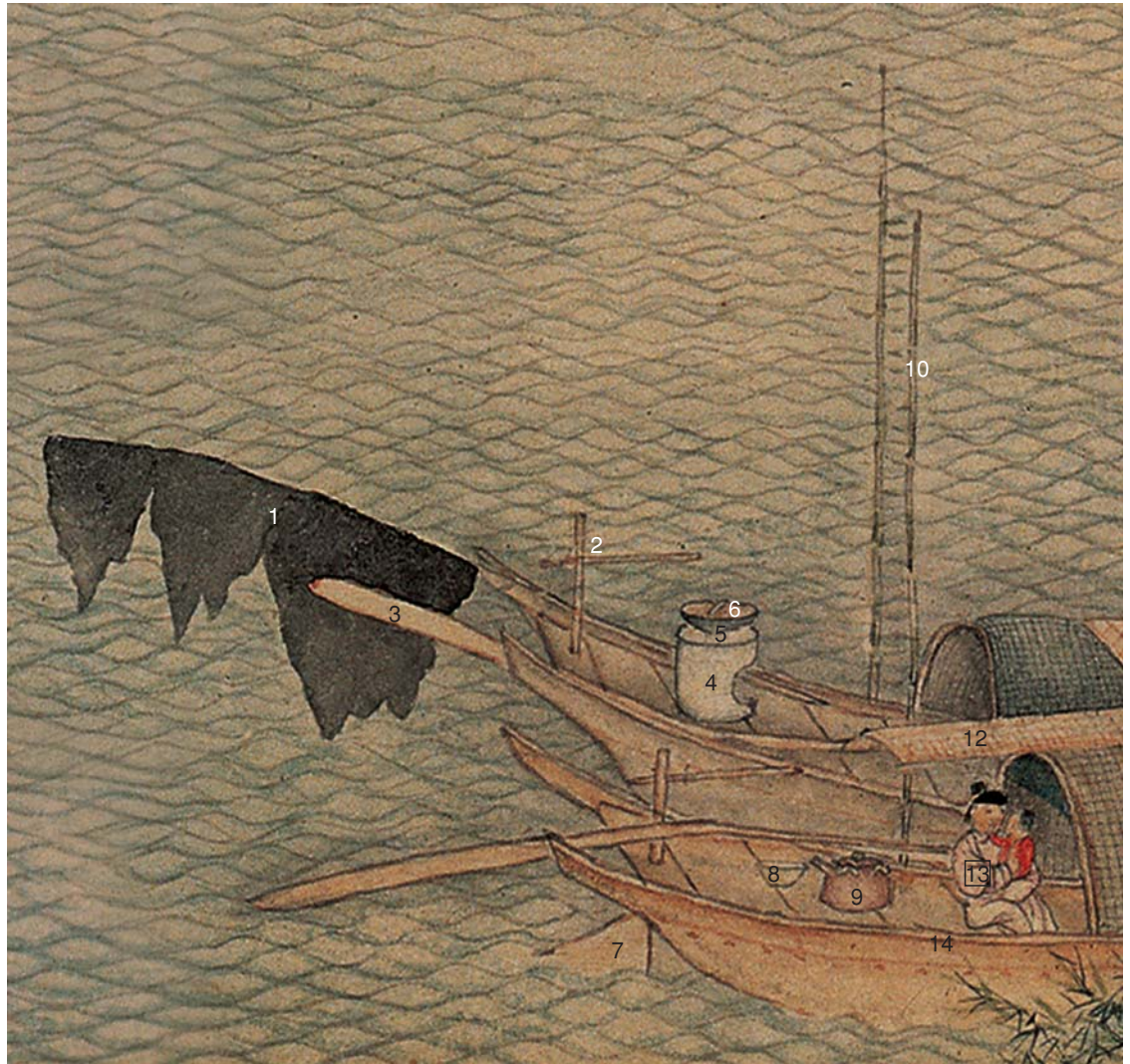
手前に簡素な木橋が川を跨いでいる。4本の橋杭が2組に、それぞれ梁木で固定、貫で補強されている。梁木の上に桁木として3本の丸太が並んで固定されており、桁木の両端は岸に置かれ、さらに左の方に補強するために1本の橋杭が設けられている。このような木橋は川幅の狭いところにしか架けることができず、雨の多い季節に流されることが多いが、農村部では貴重な施設である。裸足で橋の上を歩いている男性は笠をかぶり、籠を左肩にかけて、右手に土瓶を持っている。働く者に水かお茶を差し入れる途中ではあるまいか。

民家の板戸に赤い「門神」が貼られている。木橋の右端から右へ行く小道と、分かれて左へ垣根に沿って延びていく小道も描かれている。画家の描写の細かさが分かる。(王)

あるが、地下水が豊富な江南地方では釣瓶と縄だけでも水を汲むことができる。一方、画面の左上のように川から水を汲む家もある。水源が井戸か川かを問わず水は水桶に汲み、前後2つを1組として、天秤棒で運ぶのが一般的である。

上水道がなかった時代には、水汲みが毎日の朝一番の仕事であった。その後の一息なのか、農夫姿の

5 水上生活



- 1 網干し
- 2 舵柄
- 3 船に上げられた簾
- 4 こんろ (炉)
- 5 鉄鍋
- 6 鍋蓋
- 7 舵
- 8 井
- 9 土瓶 (水壺)
- 10 棹
- 11 苫 (船篷)
- 12 日除け
- 13 赤ん坊をあやす
- 14 船縁 (舷)
- 15 横笛
- 16 横笛を吹く
- 17 船上の酒盛り
- 18 甲板
- 19 よそ見をする
- 20 穴が開いた藁帽子
- 21 袖なしの短い上着 (馬夾)
- 22 垂らした辮髪
- 23 老人
- 24 白髪
- 25 白い眉
- 26 白い髭
- 27 酒盃

- 28 肩につかまる
- 29 帽子 (暖帽)
- 30 酒壺
- 31 酒を運ぶ
- 32 小帽
- 33 たくし上げたズボン
- 34 裸足
- 35 じゃんけん (猜拳)
- 36 肴 (下酒菜)
- 37 皿 (菜盆)
- 38 箸
- 39 振り向く
- 40 腰掛け (板凳)
- 41 葦
- 42 佇む少年
- 43 総角
- 44 赤い靴
- 45 料理を運ぶ女性
- 46 屋形 (船艙)
- 47 簾
- 48 干されている大網
- 49 枝垂れ柳

蘇州城の西南にある石湖は、南の越来溪を通じて中国最大の淡水湖・太湖につながっており、漁業が盛んであった。画面では大きな枝垂れ柳のある湖岸に網が干されている。横に繋がれている4隻の船の甲板では、男たちが酒盛りをしている。

ほとんどの人が直接甲板か船縁に座っているが、腰掛けを使っている人も見られる。酒肴をはさんで向かい合う2人はじゃんけんの最中で、右に総角の子供が遠くからそれを眺めている。中央に、髪も眉も髭も真っ白な老人が酒盃を右手に隣の人の話に耳を傾けている。「暖帽」などから主人格に見える中年男性の背後から子供がのぞき込むように見物している。船室から女性が蒸し魚らしき料理を持って出



ようとしており、帽子をかぶった若者が酒壺を手に持ち、酒の給仕に急いでいるようである。船上の酒盛りは真っ盛りということが表現されている。しかし、一番左になぜかその賑やかさに背を向けてよそ見をしている者もいる。

やや離れたところに2艘の漁船が停泊しており、水底に差し込んだ竹棹はもやい杭としての機能を果たしている。男が前方の甲板で横笛を吹いており、女性が後方の甲板に座り、赤ん坊を膝に乗せてあやしている。甲板にあるこんろ、鉄鍋、茶碗、土瓶などの生活用具を見れば、これはおそらく水上生活者の家族であろう。艀は上げており、網が棹に掛けられ、干されている。

太湖での主な漁法は曳網漁であり、漁船が2艘1組、あるいは4隻1組で行動する慣習があった。同じ乾隆時代、蘇州出身の金友理が編纂した『太湖備考』（1750年）にも、太湖の最大規模の漁船は帆柱が6本で、4艘で「一带」というチームを組んで行動したという記録が見られる。漁のシーズンが冬・春であり、清明節前後が境目である。4月以降しばらくは漁業に従事する者にとって一番経済的にも時間的にも恵まれる時期である。

干した網、賑わう酒盛り、横笛を楽しみ、赤ん坊と戯れる家族という構図は、太平の時代における漁民の理想像が凝縮されているといえよう。(王)

6 筏



- | | | | | |
|---------|-----------|-------------|-------------|------------|
| 1 大型船 | 10 杭 | 19 こんろ (炉) | 28 急須 (茶壺) | 37 帽子 (暖帽) |
| 2 錨 | 11 筵 | 20 鍋 | 29 机 | 38 上着 (外套) |
| 3 舵 | 12 船客 | 21 朱塗りの盥 | 30 椅子 | 39 長着 (袍子) |
| ④ 筏 | 13 棹を差す | 22 物売りの舟 | 31 竹の筏 | 40 布靴 (布鞋) |
| 5 敷き板 | 14 小船 | 23 植木鉢 (盆花) | 32 肩を組む | 41 裸足 |
| 6 木槌 | 15 重箱 | 24 小机 | 33 笠 | |
| 7 大型の土瓶 | 16 舵柄 | 25 艫を漕ぐ女性 | 34 上着 (短衣) | |
| 8 甕 | 17 苫 (船篷) | 26 ハム (火腿) | 35 ズボン (裤子) | |
| 9 綱 | 18 肘枕 | 27 茶卓 | 36 帯 (腰帶) | |

蘇州城門付近の船着き場の様子を描いたもので、画面には丸太を3、4段積みにした筏が4艘、それに竹を組んだ筏が1艘描かれている。丸太を縄で結わえ、所々に杭を打ち込んで縄を締め上げているように描かれている。筏の上には所々に板、あるいは簀の子を敷き、いろいろなものが置かれている。苫葺きの小屋に机と椅子、木槌や綱、甕や土瓶、鍋のかかった大型のこんろなどが積まれている。描かれている生活用品の種類も数量もさして多くはないが、

右側の筏の上の小屋の中には肘枕をしている人物が、下の筏の小屋の中には机の上の急須がそれぞれ描かれていて、筏の上で生活が営まれていることがはっきりと表現されている。

筏には船頭がいて、棹をついており、一見筏を動かそうとしているように思われるが、筏の周囲には3艘の小舟が近づいてきて、物や人を送り届けようとしているらしい。とすると、筏の船頭が棹をついているのは筏を止めるためであるかもしれない。



左側の筏の上に描かれている小舟の船頭は、竿を他の大きな船の側壁についでいるが、これは船中の人に合図を送っているように思われる。この小舟と4人の乗客は筏とは無関係のようにも見えるが、船客の一人が立ち上がって筏の方を見ていることから、これから筏に乗り込むようにも思える。他の2艘の小舟は筏に近づいてきて、船頭同士が会話を交わしているように描かれており、物売りか、何か品物を届けるためであろうと考えられる。

左側の筏の上には筵に座った老人が描かれているが、船頭とは明らかに服装が異なっているため、船客ではないかと思われる。

右下の筏の上には肩を組んだ2人の人物が描かれている。「姑蘇繁華図」のなかでは、人間の様々な動作が描かれているが、肩を組むという動作はここだけである。(鈴木)

7 太鼓橋を渡る



画面の中央に石造アーチ型の橋が見え、橋の上で往来の籠屋や床屋、そして風呂敷や荷物を担いでいる者が目立ち、欄干越しに水の流れを眺めている人物もいる。

江南は「水郷」と呼ばれ、蘇州城内にも縦横に水路が引かれており、基盤の目のように作られた道路と二重の交通網を形成している。橋はこの二重の交通網を立体的に繋ぐ重要な結節点である。マルコ・ポーロの『東方見聞録』（1299）では、蘇州に600もの橋があると記されている。

中国において橋は南北を問わず石造アーチ型がも

っとも普遍的な様式であった。ただし北方では、馬や車の利用が多いため、橋の勾配が緩やかであるのに対して、江南地域では船の通行を優先させ、アーチを高くする傾向があった。3世紀の『水経注』にすでに記録が見られ、早くもその技術の発達を見せたアーチ型石橋は、明清時代において飛躍的な発展を遂げ、特に康熙から乾隆にかけて建て直しや補修のブームを迎えていたという。

水面の広さに応じて橋のアーチも1個から十数個にもわたるが、1個だけの太鼓橋は最もよく見られ、橋といえばまずこの形が思い浮かぶほどである。建



- | | |
|---------------|----------------|
| 1 塀 (囲牆) | 30 杖 |
| ② 楼門 (巷門) | ③① 風呂敷を肩に掛ける |
| 3 瓦屋根 (卷棚頂) | ③② 眺める |
| 4 入母屋 | 33 風呂敷 (包袱) |
| 5 破風 (搏風) | 34 床屋 (剃頭匠) |
| 6 隅棟 (齷脊) | ③⑤ 太鼓橋 (単拱石橋) |
| 7 格子窓 (檻窓) | 36 欄干 (欄杆) |
| 8 羽目板 (檻牆) | 37 手すり (尋杖) |
| 9 丸窓 | 38 裝飾板 (欄板) |
| 10 妻 (山牆) | 39 レリーフ (浮彫) |
| ⑪ 女性 | 40 親柱 (橋欄柱) |
| 12 まげ (髻) | 41 兜 (柱頭) |
| ⑬ 提げる | 42 地覆 (地袱) |
| ⑭ 横見をする | 43 アーチ (拱券) |
| 15 辮髪 | 44 迫石 (券石) |
| 16 短い上着 (馬褂) | 45 側壁 (山花牆) |
| ⑰ 指差す | 46 橋の下 (金門) |
| 18 帽子 (暖帽) | ④⑦ 店舗 |
| 19 上着 (外套) | 48 日除け (幔) |
| 20 長着 (袍子) | 49 看板 (招牌) |
| 21 手甲袖 (馬蹄袖) | ⑤⑩ 脇に抱える |
| ⑳ 背中に負う | ⑤① 振り向く |
| ②③ 箍屋 (修桶匠) | ⑤② 二人で担ぐ |
| 24 道具の包み (包袱) | 53 担い棒 |
| 25 木桶 | 54 スカート (裙子) |
| 26 箍 | 55 袖なしの上着 (半臂) |
| 27 絡げた裾 | 56 織物 (布帛) |
| 28 脚絆 (綁腿) | ⑤⑦ 両手で持つ |
| 29 布靴 (布鞋) | 58 盆 (托盤) |

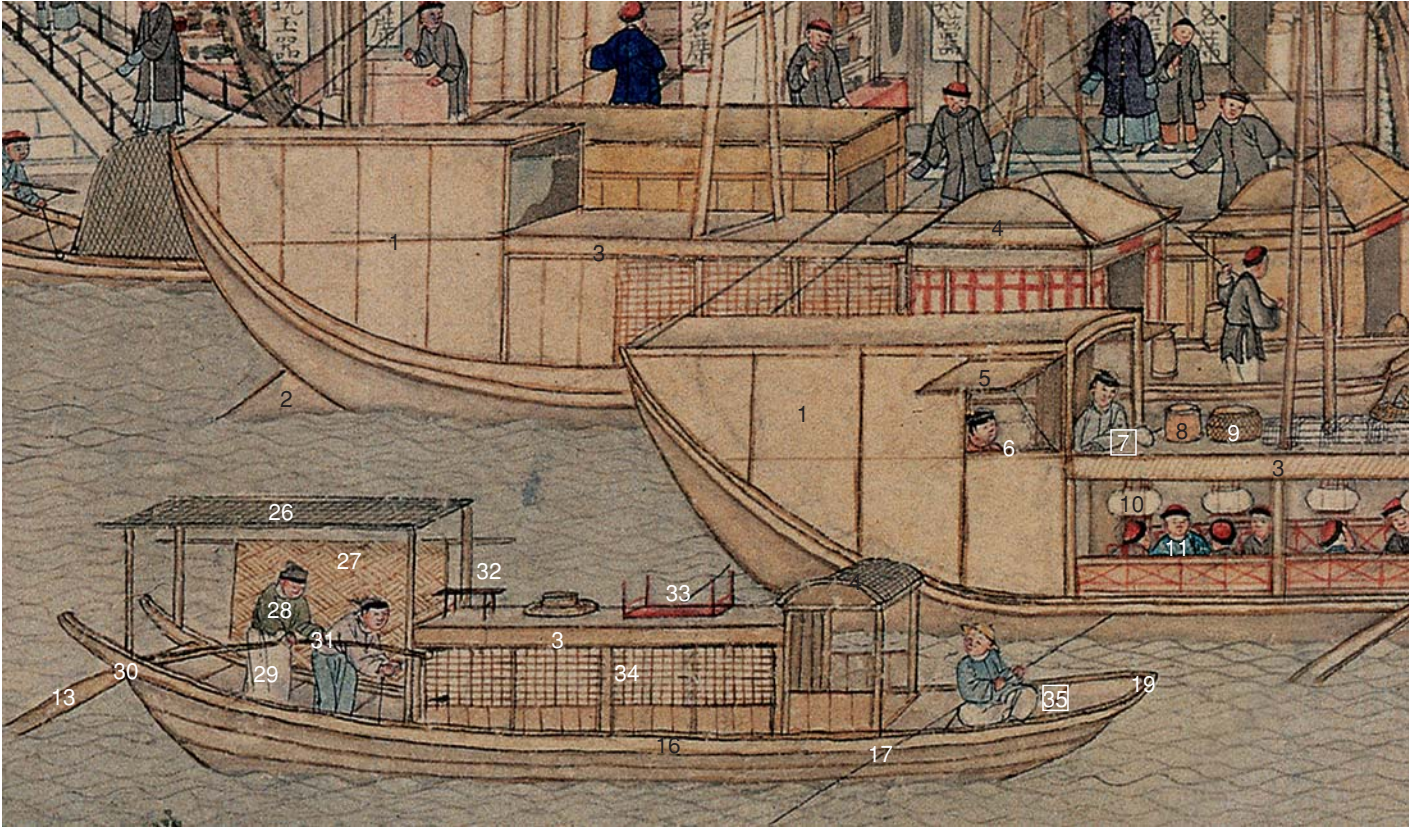
築法はまず石で両側の岸から川に向かって基礎を作り、その上で迫石を繋ぎ合わせてアーチを作る。アーチの作り方はいくつかあるが、画面の橋は、独立したアーチを横に繋いでいく「聯券式」のようである。外側の迫持と同じ平面で、アーチから岸まで側壁を作り、その間を土で埋め、上に石階段、あるいは溝の施された道路を敷く。最後にその両側に親柱を立て木造や石造の欄干を設置するが、画面のように、欄干の裝飾板に彫刻が施されているものも多く見られる。

橋は往来の要路であり、同時に商業と軍事の要地

でもある。画面では橋の向こう側（東側）に商店街が広がっている。そして手前（西側）に「巷門」という特殊な二階建ての建物があるが、これは軍事施設の名残りである。道の中央に築かれており、1階にあたる部分は通り抜けの通路となっており、2階からは道路の状況を遠くまで一望できる。「巷門」をくぐった女性は、川辺でおまるを空けて帰る途中なのだろうか。

この橋は、乾隆時代の「姑蘇城図」（天理図書館所蔵）では黄鸝橋となっており、橋の西端に「巷門」らしき図形が描かれているが、名称が記されていない。南側には江蘇省の行政、軍事、財政を司る「布政司」をひかえ、道路はほぼ蘇州城の南北の中央に位置する立地であった。1931年にこの道が西へ城壁に突き当たるところに新たに「金門」が開かれた。（王）

8 船で働く女性



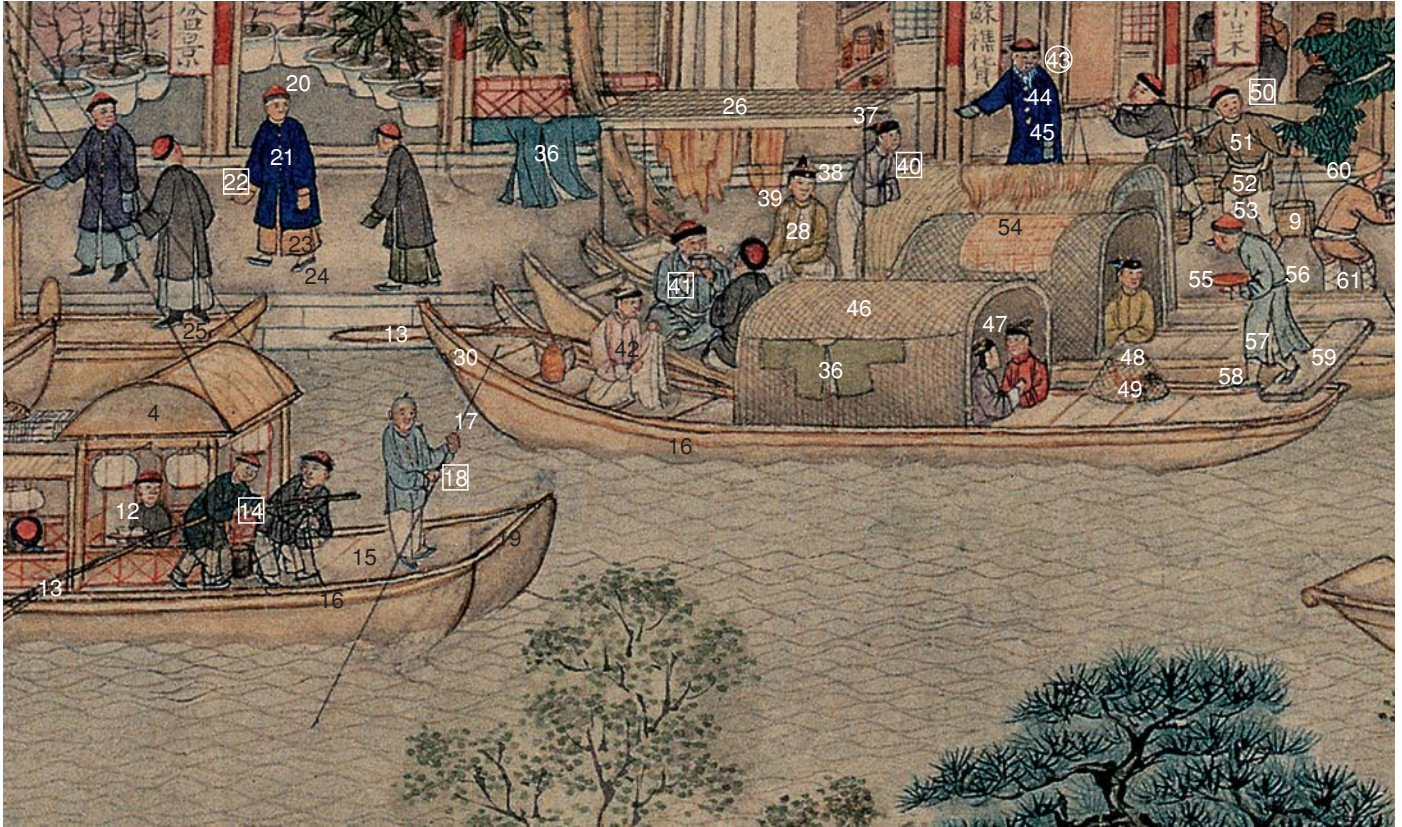
- | | | | | |
|----------------|--------------|--------------|-----------------|-------------|
| 1 鱸屋形 (船艙) | 14 艚を漕ぐ | 26 鱸屋根 (船棚) | 39 耳飾り | 52 扱き帯 (汗巾) |
| 2 舵 | 15 甲板 | 27 蓆 (席) | 40 手を袖に入れる (箆手) | 53 ズボン (褲子) |
| 3 屋形 (中艙) | 16 船縁 (舷) | 28 上衣 (短衫) | 41 茶を飲む | 54 菰 |
| 4 屋形 (頭艙) | 17 棹 | 29 スカート (裙子) | 42 針仕事をする女性 | 55 盆 (托盤) |
| 5 突上げ窓 (支窓) | 18 棹を差す | 30 鱸 (船) | 43 老人 | 56 帯 (腰帶) |
| 6 鱸屋形にいる女性 | 19 舳先 (船) | 31 艚を漕ぐ女性 | 44 髻 | 57 裾 (下擺) |
| 7 凭れ掛かる | 20 帽子 (暖帽) | 32 腰掛け (板櫂) | 45 釦 | 58 靴下 (襪子) |
| 8 素焼きの鉢 (陶盆) | 21 上着 (外套) | 33 ちゃぶ台 (几) | 46 苫 (船篷) | 59 歩み板 |
| 9 籠 (筐) | 22 手甲袖 (馬蹄袖) | 34 格子窓 | 47 髪飾り | 60 笠 |
| 10 絹張りの提灯 (紗燈) | 23 長着 (袍子) | 35 甲板に座る | 48 鳥籠 (鶏籠) | 61 脚絆 (綁腿) |
| 11 客 | 24 布靴 (布鞋) | 36 洗濯物 | 49 鶏 | |
| 12 接客係 | 25 布製の長靴 | 37 まげ (髻) | 50 天秤棒で担ぐ | |
| 13 琵琶鱸 | | 38 鉢巻 (遮眉勒) | 51 上着 (短衣) | |

蘇州城と虎丘をつなぐ山塘河を往来する船で働く「船娘」という女性を描く場面である。普段は女性の外出すら厳しく規制されていた当時の中国では、異例な存在といってよいであろう。彼女たちは、料理を作ったり、船を漕いだりするほか、接客や売春を行うこともあった。

山塘河は唐代に造られた運河であるが、古来、行楽地として有名な所である。なかでも「船菜」という船で楽しむ料理が最も有名である。『桐橋倚棹録』

(1842)によると、船菜を経営する船にいくつかの種類がある。画面の中央に1艘の大きい船があり、その中央の屋形に2組の客がいる。これは「沙飛船」のようである。鱸屋形に2人の女性が見られる。船菜はほとんど、客の注文に応じて鱸屋形におかれた厨房で、女性料理人によって作られたので、この2人も料理人であろう。

左手に、やや小型の船が見られる。中央の屋形に格子窓があり、その上にちゃぶ台や腰掛けが載せら



れている。これも船菜を経営する船であるに違いない。画面の右にあるやや外観に華麗さが欠けている船は、少人数の客を相手に船菜を経営するほか、交通手段としても使われる船で、「小快船」というものようである。

また、ここに見られるように、清朝の命令によって乾隆年間に男性の服装と髪型はすでに満州族風に変わっていたが、女性は依然として明代の服装と髪型を保っていた。服は上衣とスカートに分かれ、袖

は小さく、高さ約3センチの襟があり、装飾が少ない。まげを高く結っており、額に遮眉勒をつけている。ここに描かれている女性は、多くの髪飾りを用いていることに注目したい。画卷に見られる女性のなかでも特に派手に見える。男性客を相手に商売を営んでいるゆえであろう。(彭)